

京都産業大学 ことばの科学研究センター

2022年度 第4回研究会

19世紀後半から20世紀末までの ロシアと日本の文学作品における発話表現の比較

北上 光志

(ことばの科学研究センター 研究センター員・外国語学部教授)

前回(2021年10月20日)の研究発表では、19世紀から20世紀に書かれたロシアの文学作品における動詞と分詞の観点に関するテキスト言語学的特徴を直接話法構文との位置的關係から通時的に明らかにした。このことに関連して、今回はロシアと日本の文学作品における発話表現(「登場人物の発話文」と「地の文」の組み合わせパターン)を比較し、両言語の違いとその原因を考察する。従来の研究では、こういった点がまだ明確にされていない。

19世紀後半から20世紀末までのロシアと日本の小説を分析する。日本は明治に入り西洋の小説が大量に翻訳され、日本の小説が西洋式の書き方をするようになった。これによって、19世紀後半以降のロシアと日本の小説の発話表現を同一基準で比較することが可能である。両国を代表する作家たちの作品における発話表現(日本語 72 作品の 12,598 例とロシア語 30 作品の 14,528 例)を分析した。

分析した小説で用いられている「登場人物の発話文」と「地の文」の組み合わせは4パターンであった: ①「地の文」+「登場人物の発話文」+「地の文」、②「登場人物の発話文」+「地の文」、③「地の文」+「登場人物の発話文」、④「登場人物の発話文」+「地の文」+「登場人物の発話文」。この4パターンの使用頻度をロシア語と日本語の小説で比較すると、ロシア語は②と④の使用頻度が高く、一方、日本語は①と②の使用頻度が高い。両言語とも②のパターンは共通しているので、決定的な違いは、ロシア語の④のパターンの多さと日本語の①のパターンの多さである。

4つのパターンを「作者のことば」と「登場人物のことば」の関係からみると、①は「作者のことば」が「登場人物のことば」を包み込んでいるので「作者のことば」の要因が強い。一方、④は「登場人物のことば」が「作者のことば」を包み込んでいるので「登場人物のことば」の要因が強い。②と③は「作者のことば」と「登場人物のことば」に対して中立である。このように考えると、日本の小説の発話表現は「作者のことば」の影響下にあり、ロシアの小説の発話表現は「登場人物のことば」の影響下にあると言える。発表では、これらの違いをロシアと日本における小説と演劇の歴史的関りから解き明かす。

9月28日(水曜日)

15時00分開始 17時00分終了

第二研究室棟会議室・Teamsによるオンライン開催

オンラインによる参加の場合のみ、下記へメールでお伝えください。

center-lg-studies@cc.kyoto-su.ac.jp (ことばの科学研究センター)